

西荻隨筆

坂口安吾

青空文庫

丹羽文雄の向うをはるワケではないが、僕も西荻随筆を書かなければならない。どうしても、西荻随筆でなければならぬようである。

西荻窪のTという未知の人から手紙がきた。ひらいてみると、約束の日いらつしやいませんでしたが、至急都合をつけて来て下さい、という意味の文面で、日蝕パレス（仮名）女給一同より、となつている。

私は、西荻窪という停車場へ下車したことは生れて以来一度もないのである。もつとも、去年は酔つ払つて前後不覚、奥沢の車庫へはいり、お巡りさんに宿屋へ案内してもらつたような戦歴もあり、前後不覚の最中に何をやっているか、どこへ旅行しているか、ちよつと見当のつかない不安もあつた。然し、幸いなことには、ここ一ヶ月は、京都へ旅行し、旅行先で病臥し、帰京後も、かぜが治らず、病臥をつゞけ、あんまりハナをかんで、中耳炎気味で、日々苦しく、まったく外出したことがない。だから、前後不覚のうちに日蝕パレスへ遠征した筈は有り得ないのである。

去年の暮、僕の旅行中、Tという人の使いというのが来て、ふだん来る雑誌記者と人相態度も異り、十五分もねばつて、部屋の中をのぞいたり、うろつき廻つて、女中を困らせ

た人物があつたそうだ。まさしく手紙の主のTなる姓であるから、なるほど、左様な次第であつたか、と、私も合点がいった。

戦争前には、僕のニセモノはずいぶん横行した。ニセモノの横行する条件がそろつていたのである。つまり、坂口安吾という顔は誰も知らない。文壇の内部では、名前だけは通ずる。広い東京には、文学女給、文学芸者、文学ダンサーなど、頓狂なのが居るもので、そういうところでは僕の名前が通用して、まずシツポのでる心配がないから、ニセモノが横行し、中には文学青年のグループを手ダマにとつて、羽振をきかせて威張つていたものもいた。俳句をつくるアング氏もおり、色紙を書き与え、ホンモノの企て及ばざる芸達者な威風を發揮し、先日その色紙を見たが、惚れ／＼する筆蹟であつた。

十年ほど前、京都に二年ちかく放浪していた留守中、銀座に羽振をきかせていたアング氏は最も優秀な手腕家で、モダン日本の木村正二が京都の僕を訪ねての話に、銀座のアング氏は当時銀座有数の美貌の女給とネンゴ口になつて岡焼き連をハイゲイしていた由で、こういう有能なアング氏なら、いつそ本家を譲り渡して、天下に威名をあげて貰いたいものだと思つたほどであつた。

終戦後は、文学雑誌がやたらと文士の写真をのせることが流行しているから、文士のニ

セモノが出にくくなった。こう、安心してはいけなものである。顔がレットルの映画俳優にまで、ニセモノがいるそうだから、文学雑誌に写真ぐらいでたつて、ニセモノ氏は平然たるものなのである。

西荻窪のアンゴ氏は、終戦後初登場のニューフェイスで、私も、いさゝか慌てた。

手紙が豪勢である。女給一同より、とある。よほど大きな店にちがいない。中央線沿線は文士族の群生聚楽^{しゅうらく}地帯で、僕が行ったことがないが、ピノチオなど、いう文士御専用の喫茶室があつたことなど、十何年前から耳にしている。新田景気など、云つたつて、どうせ文士の行くところはカストリ屋に羽の生えたようなところに極っており、女給一同より、というような豪勢なところは、ホンモノ共は立寄ることができないのである。だから、西荻のアンゴ氏は、文士族群生聚楽地帯をカツポして、正体を見破られる心配がないのである。

西荻のアンゴ氏が、いかなる放れ業をやらかしているのか、いささか心配であつた。僕の知らない子供などが生れて、印税を要求され、余の死するや子孫が数十人名乗りでたなど、あつては、まア華やかで結構ではあるが、ネザメのよろしい話ではない。

カラダには熱があり、中耳炎気味で耳が痛くて困っている時であつたが、それだけに、

仕事もやりたくない状態だったから、西荻へ出向いて、アカシを立てることにした。

一人では、とても行けないから、大井広介に助太刀をもとめて、代々木へ訪ねたら、彼はイトコが立候補して、選挙応援に九州へ出向いて不在であった。郡山千冬なら睨みがきくだろうと電話をかけてもらったが、これも不在。銀座なら、雑誌社、新聞社がたくさんあって、豪傑の三人四人たちまちり集めることができるが、新宿には、その当てがない。一人、居た。紀伊国屋の田辺茂一先生。これは、ふとついで、睨みがききそうである。喜び勇んで紀伊国屋へ駆けつければ、社長は、今しがたお帰りになりました、という返事であった。

かくては、是非もない。灯ともし頃となり、豪傑どもが、三々五々カストリ街へ現れるのを待つばかり。ところが生憎なもので、谷丹三の店と、マコの店を、行ったり来たり、豪傑の訪れを待っているのに、こういう時に限って、一人も豪傑が現れない。谷崎精二先生のような温厚な君子人が現れるばかり、ままならぬものである。

両店を往復しているうちに、私はメイテイしてしまった。灯ともし頃もすぎ、パンパンの数も少くなり、いつまで待っても仕方がないから、一人で、でかけた。

西荻窪で降りる。マーケットを歩き廻ったが、この迷宮には日蝕パレスは見当らない。

人にきいたら、分った。表通りの、焼け残りの堂々たる店であつた。今は一階が喫茶室になつてただけだが、地下室も二階もあり、女給一同が揃つていた頃は、百人ぐらい居たろうと思われる大殿堂であつた。西荻などと馬鹿にしてはいけない。アング氏ほどの大人物が現れる以上、文士族は足がすくんで、とても階段をふむことができないような大殿堂が存在するにきまつていたのである。

大きな奥深い店に客の姿がなく、バーテンと女給が一人いるだけであるが、どこに伏勢があるとも分らぬ昨今の状勢であるから、敬々うやうやしく一礼して、こちらへ坂口アング氏が参りますそうで、とたずねる。えゝ、えゝ、よく、いらツしゃいます、と女給がはずむように景気よく答えた。

実は、私が、坂口安吾そのものズバリでありまして、と、声がふるえた。まったく恐縮するのは、こつちの方で、西荻のアング氏は、僕と違つて、威風堂々地を払っているに相違ない。このニセモノめ、と襟首つかまえられゝば、もうホンモノはダメなのである。

けれども、バーテンも案に相違、好人物の中年男で、今に女給が帰ってきますから、と僕をかけさせて、コーヒーを持ってきた。そこへドヤ〜と女給の一群が戻ってきた。そうだろうさ、手紙にも、女給一同より、と書いてあつたのだからネ。

女給の中から、代表が現れて、進みでた。この女給が、手紙を書いた女給であつた。二階でビールを一本のんで、この女給から、アング氏の話をきいた。

アング氏は四十二三の小男で、メガネをかけていたそうだ。似ていますか、ときいたら、いゝえ、全然。アング氏は、大へんお金持だつたそうで、やつぱり偉いのである。

去年の六月から現れた。つまり、太宰事件の直後らしい。情痴作家という噂もなかつた太宰でもあれくらいだから、悪名高いアングは大いにやるべきである。西荻のアング氏が、こう判断した心境も分らないことはない。

西荻のアング氏は、ビール一本の三分の一ぐらいで赤い顔になる少量の酒のみで、それ以上は飲まず、常にもつぱら女を口説いたそうである。

一人の女給が、ニセモノを見破つていたそうだ。この女給は西荻アング氏と泊りに行つた。帰つてきて、あれはニセモノよ、ホンモノはふとつた大男の筈よ、と云つたが、ニセモノかホンモノか追及する情熱はてんでなく、ニセモノを承知で遊んで、ほかの店へクラガエのとき、あれはニセモノよ、ともう一度云い残して、あつさりどこかへ行つてしまつたそうである。

西荻アング氏は少量の酒のみであるから、店に借金はないのであるが、多くの女給をや

たらと口説いて、泊って、女に金をやらなかったり、女から金を借りたり、つまり日蝕。パレスは被害をうけずに、「女給一同より」せしめていたのである。このへんも、手腕の妙であろう。

坂口安吾を名乗って、西荻窪の刑事と握手したことなどもあるそうだから、偉い。ついでに、税務署の役人と握手して、税金をタダにしておいてくれると、もっと偉いのだが、今カラデモオソクハナイ。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「文学界 第一巻第一号」

1949（昭和24）年3月1日発行

初出：「文学界 第一巻第一号」

1949（昭和24）年3月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：砂場清隆

2008年4月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西荻随筆

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>